

香港島から北西へ百キロ。中国本土に鋭く入りこんだ南シナ海がある。広東省グワンウトンのそのあたり一帯は南シナ海へと流れこむ北江ペイジャンや東江トシジャンの支流が細かに走り、珠江ジウミジャンと呼ばれる水郷地帯となっている。

珠江の最も奥まったところ、尖った南シナ海の切れこみのその先端には、虎門フイメンという名の小さな町があった。虎門は海に面し、珠江の大小いくつもの中州となった島々への、南からの訪問者を迎えられる場所に位置している。

香港からわずか数時間の海路で、中国本土へと足を踏み入れることができるのだ。香港は、現在、中国本土からの密入国者に神経を尖らせている。だが、香港から中国に向かう者、たとえば船を使った行商人などに対しては、黙認の形をとっている。

船で中国本土に運ばれるのは、西側の電気製品や煙草、酒などといった生活用品だけではない。ときには、情報が、そしてときには人間が、運びこまれ、出ていく。

中国政府にとつても、こうした裏の取引きは、必要悪といえる。ただし、でたらめな闇マーケット、闇取引きを阻止するために、そこには規律があり、破った者を処罰する自警団が存在する。

かつて中国には「洪門会」という秘密結社が存在した。清代には、「天地会」と呼ばれ、孫文の革命などにも協力した歴史があり、やがて、「三合会」「哥老会」などに分かれていった。

この「三合会」は、現在の香港に存在する暴力団「十四K」「三合会」とはちがう。ただ、「洪門会」を「紅幫」と呼び、自らもならつて「白幫」や「黒幫」などと名乗つて、その組織運営をまねた暴力組織に、大きな影響を与えたことだけは事実である。

かつての「洪門会」のメンバーは、香港にも、そして中国本土にも存在する。

「洪門会」組織の特徴は、各組織が並列に存在し、縦関係での情報伝達がないことだ。犯罪組織がこれをまねたのは、トップが逮捕されることで全組織の崩壊がおきるのを防ぐことができるからだ。

中国政府は、船によって出入りする者たちの監督に、この旧「洪門会」の組織をあてた。旧「洪門会」のメンバーは、中国政府要人にもいるとされており、そのもたらす情報がいち早く政府内部に伝わる、というメリットもあったのだ。

当然ながら、今では「洪門会」はひとつの意志をもった大集団、大秘密結社ではない。個々の組織といった形を残しながらも、その性格は、それぞれ大きく異なっている。

そのサンパンのような平底の小舟が、虎門の小さな棧橋に横づけになったのは、六本木「クライシス」での銃撃戦からふた月が経過した、新月の晩だった。

小舟は、ビクトリア湾に浮かぶ何百という同じようなサンパンと何らかわらないように見えた。ありふれていて、うすよこれ、バケツから食器、洗濯物にいたるまで、水上生活者の家財道具い

っさいが積みこまれているように見える。そしてまた、けちな海の「行商人」の足兼オフィス兼住居として、ぴったりのようにも見える。

もしこの小舟がビクトリア湾を行き来する舟の中にまぎれこめば、どれがそうであったかを見分けられる人間はほとんどいないだろう。

棧橋に横づけになった舟のもやいを結んだのは、棧橋のすぐそばに建てられた小さな監視小屋から出てきた人間だった。

二人の男たち、どちらも解放軍の制服を着け、小銃を肩からさげている。時刻は午前二時をまわり、小さな海への町は深い眠りの中にあつた。

小舟の粗末なキャンビンから、カーテンをめくって、二人の人物が現われた。二人とも色あせた黒や紺の衣服を着こみ、編笠のような、深くつばの大きな笠をかぶって、顔立ちをかくしている。ひとりはほっそりとしていて、棧橋に乗りうつったとき、手首に巻いた金の鎖がきらめいた。もうひとりはがっしりとした体格で、鍛えぬかれた筋肉が綿の薄地のシャツを内側から盛りあげている。

「……」
向かいあつた二人組どうしの、がっしりとした編笠の人物から、合言葉と覚しい、広東語のつぶやきが発せられた。

解放軍の兵士の制服を着た男のひとりが、同じく広東語で応えた。

ふたりは歩みより握手をした。がっしりとした男の手から兵士の手へと、そのとき素早く紙幣が手渡された。

兵士は小さく頷いて、歩きだした。先頭の兵士のあとを、ほっそりとした編笠の人物が、そのあとをがつしりとした編笠が、そして最後をもうひとりの兵士が歩いた。

四人は静寂に支配された小さな町を徒歩で進んでいった。ときおり、民家の庭先で犬が吠え、放し飼いの鶏が鳴き声をあげる。

だが、四人のほか、この町で目ざめている者は誰もいないように見える。やがて、先頭の兵士が、一軒の家の前で立ち止まった。

それは頑丈な、石でできた建物だった。第二次大戦前からの建造物であることは、崩れかけた門柱や蔦のからみついたフレンチウインドウからも見てとれる。

建物の入口には、ところどころ錆を浮かせた鉄の扉があつた。兵士は、ノックもせず、その扉を開いた。かすかな軋みをあげながら、重い扉は内側に開いた。

その奥は、なめらかな石を埋めこんだ廊下だった。中央のあたりに、ぼつんとひとつだけ裸電球が点っており、その向こう側がどんな状態なのかは、見てとることはできない。

兵士は怯えたようすもなく、その廊下を進んでいった。裸電球の光を、兵士のさげたAK47—1小銃の銃把が鈍く反射する

四人は廊下のつきあたりにある観音開きの扉に到達した。そこで初めて、先頭の兵士は銃をおろし、扉をノックした。

低いつぶやきの音が扉の向こうで応えた。広東語で誰何する声がつづき、兵士はそれに答えた。扉が内側から開かれた。開いたのは、八十をとうに越えたと覚しい、中国服の老人だった。のびた顎ヒゲの白い先端は、胸のあたりにまで達している。額や頬の、深く刻みこまれた皺は、濃く焼けた肌に強い陰影をかたちづくっていた。その風貌は立派で、威厳と叡智を感じさせた。扉の奥は広い、西洋式の部屋だった。年代物の布ばりのソファ、背もたれのまつすぐな木の椅子、そして火の入られていない、レンガのマントルピースがあった。壁には、モンゴルのタペストリーが飾られていた。

老人は四人を迎えいれると、すわるよう手ぶりで示した。

編笠の客ふたりはソファに、兵士たちは木の椅子に腰をおろした。

老人はソファと向かいあった木のベンチに腰かけた。老人と編笠の客たちのあいだには、オーク材のテーブルがあり、茶の入ったポットと茶碗が並べられている。

ここで初めて、ふたりの客は、編笠をとった。編笠の下からは、橋詰海人が、それぞれ、ヘンリー、スン・リーという名で知る男女の顔が現われた。

しきりに従って三人のあいだで、〈洪家〉に属する者の挨拶が交された。やがて老人が茶をすすめ、二人の男女は礼をのべて、茶を口にした。

「ここからの会話は英語で行ないたい。よろしいか」

ヘンリーが英語でいったのは、ひと口、ほんのかたちだけ茶を口に湿らせた直後だった。老人は無表情のまま頷いた。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。